

巖島門前町の宗教空間とその限界

—「あし山」の立地条件を手掛かりとして—

巖島（宮島）はいつの頃からか「神の島」と呼ばれるようになり、死穢（黒不浄）や産穢（赤不浄）などを忌む風潮が強くなった。その名残は今日もなお残されている。このケガレを忌む風潮は巖島神社の聖域性を守る配慮で、神官などはいうまでもなく門前町の人々をも厳しく縛ってきた。ケガレに触れた人はその強弱により巖島を一時的に離れるか、島内の「あし山」に退避する必要があった。ここではケガレに触れた人々の一時的退避場所、「あし山」の立地条件を手掛かりに、巖島門前町にも目に見えない結界があった可能性を探る。

江戸時代も中頃になると、巖島門前町に「東町」・「西町」という区分けが生まれていた。また、「あし山」も「東町」の東側と、「西町」の西側に設けられた。「東町」の「あし山」と呼ばれたところは、巖島神社の鬼門「大弥堂」（図1）の東側に位置した。「東町」は後代になると、「あし山」よりさらに東側に広がる。ただ、新町の遊女は隣接する「あし山」に退避できなかった。東町の「あし山」と新町のあいだの小川が新たな結界になったと思われる。「西町」の「あし山」はこれとは違い、同町の西端の大西町よりさらに西側の山中にあった。「東町」と「西町」の「あし山」の立地条件の違いに気付く。これは「西町」が巖島神社の真後ろに広がり、ケガレをより厳しく忌む必要があったからだろう。「西町」の「あし山」は経の尾と呼ばれる尾根が、人家と「あし山」の境界になっていた。しかし、「東町」の場合は「塔の丘」が第一の境界になるため、「大弥堂」やその東の小川を形式的な境にすればよかったと考えられる。

巖島が「神の島」といわれケガレを厳しく忌んでも、門前町の賑わいやその発展をはかろうとすると、このような結界の妥協なども不可欠であったといえよう。

（松井 輝昭）

（「宮島学センター通信」第3号・2012年3月）



図1 かつての大弥堂（廿日市市宮島町不動堂）